

## 巻頭のことば

「かぬま詩草二〇一六」が発行できました。いつの間にか十一年次になります。出品頂いた方々に感謝いたします。鹿沼地域・周辺において詩を愛好し、詩作意欲を持続している方がたに敬意を表します。

今回もエッセイを主として招待作品をいただきました。さすが、筆力ある情趣に富んだベテランの作品をそれぞれ寄せていただきました。人柄がにじみ出ています。

難しいところですが、若い世代の参加が少しみられるようになりました。立憲政治・市民主権に危機感を抱いて立ちあがった、十五年安保の「シールズ」や「ママの会」のように、文芸の世界にも一人ひとりの真実の言葉の力が求められています。政治権力の言葉の劣化はますますひどくなっています。それを傍観することは「人間の劣化」ということだろうと思います。ここは何としても意地を張っていきたいところです。

現代文明が軽んじてきた「いのちへの眼差し」や「絆」の復権が、東日本原発震災後の日本の思潮であり、戦後日本の平和と民主主義が今まさに危篤の状態にあるとき、言霊の力こそ、そのたたかひの先端を担うべきものだろうと思います。ますます非詩的情況の進むなかで、先ずは「起て、老いたる者よ」ではないでしょうか。我々の世代の責任意識は、さらに高揚されるべき時だろうと思います。そうしなければ若い世代が、ぞっくりと立ちあがってきません。大切なのは、謙虚さと変革への志を持ち続け、寒い時代の先に光を見つけ出せるかどうか。そんな言葉のたたかひをいっしょに続けていくことだろうと思います。つながりを信じて、くじけないでいきましょう。少しではあっても次の世代の人たちの参加がすでに曙光です。

二〇一六年 一月

編集発行 鹿沼詩友会（鹿沼市文化協会加盟） 小林 守 城